

1993 年・・・『意識と知識』
1994 年・・・『意識と知識・Ⅱ』
1995 年・・・『知識は力』
1996 年・・・『何を信じていいかわからない』
1997 年・・・『懐疑心』
1998 年・・・『科学・哲学と健康管理』
1999 年・・・『科学と健康管理』
2000 年・・・『科学とは』
2001 年・・・『21世紀』
2002 年・・・『学習とコレステロール』
2003 年・・・『哲学のなぐさめ』
2004 年・・・『遺伝子の時代』
2005 年・・・『科学書と哲学書』
2006 年・・・『新年』

現在、毎月お送りしている情報は1986年から隔月で始まり、
1990年からは毎月お送りするようになり今回で 225回目となりました。
上記のタイトルは1993年から昨年までの新年のタイトルです

『100 年たっても腐らない情報は科学的なもの』
『身体の問題、健康の問題はごまかしがきかない。それは科学の問題だからである』
ということを恩師・三石巖先生に教えていただきました。

今年も科学的な健康情報をお伝えしたいと考えています。

.....

科学をする人は、「なぜ」「どうして」と考えている。
・・・人間は「なぜ」と思ってもすぐに忘れちゃう。
あるいは、適当な説明を聞いて納得しちゃう。
これじゃだめで、自分の頭にずーっと持っておくのが大事だと思います。

常識は大事なんだけど、邪魔するものなんです。
不思議だなと思ったことは、ちゃんとした答が出るまでその質問を
ずっと忘れないで下さい。その答が出ると、ものすごく嬉しい。

科学の一番の良いところは、いったんその味を覚えたら忘れないということです。
答が分かった時の面白さ、それが発見であるわけです。

科学は自分が納得するかしらないかであって、誰だってできる。
発見は回りの人が大事に思うかどうかではなく、自分にとって大事なら嬉しいんです。

・・・ 養老孟司氏の講演から

サイエンス とはもともと何かと言えば、ラテン語の scientia で知識そのものを意味している
scientia は、scio (知る) の名詞形であり、
サイエンス とは、本来、知ること全体、知識の総体を指しているのである。

・・・ 科学というものは、本来おもしろいものである。
分かれば、こんな面白いものはない。何がどうなっているかを知りたいというのは、
人間が生まれながらに持っている、どうしようもない本性であって、
その本性につき動かされて出来上がったのが、科学という知の全体像なのだから、
これが面白くなかろうはずはないのである。

もちろん分からなければ面白くないし、分からないものを分からなくても良いから
とにかく覚えろというようなプレッシャーをかけられたら（一貫してそれをやってきたのが
日本の科学教育ならぬ理科教育だった）面白かろうはずがない。

私は、ガイトン・シュタインの「語りうるものはすべて明晰に語りうる」という言葉の信奉者で
自分の特性は、難しいことを分かりやすく語ることにあると思って、
この仕事を続けてきた。

・・・ 立花隆氏の著書から